街を生きた教材に。「ヒルズ街育プロジェクト」を開催/森ビル　広告

赤ひげ大賞　受賞者喜びの声　「終わりでなく通過点」

2022/5/12 20:59

「赤ひげ大賞」表彰式に臨む、赤ひげ大賞受賞者の（左奥から）植田医院の植田俊郎医師、仙北市西明寺診療所の市川晋一医師、シャローム病院の鋤柄稔医師、大石クリニックの大石雅之医師、佐藤医院の佐藤立行医師＝１２日午後５時２分、東京都千代田区（萩原悠久人撮影）

Ads by Google
フィードバックを送信
広告表示設定

地域で献身的な医療を行う医師を顕彰する第１０回日本医師会赤ひげ大賞の表彰式が１２日、東京都内で行われ、大賞を受賞した５人の医師が表彰された。その一人で植田医院（岩手）の植田(うえた)俊郎院長（６７）は、東日本大震災の際に大槌町にある医院で被災したが、屋上に避難したことで難を逃れ、不眠不休で診療を行った。受賞に対し「やれることをやった。評価してもらい光栄に思うがかえって気恥ずかしい」と謙遜した。

仙北市西明寺診療所（秋田）と仙北市桧木内(ひのきない)診療所（秋田）を掛け持ちして地域医療に取り組む市川晋一所長（７０）は「地域の人が受診してくれるからこそ診療所は成り立つ。受賞は地域の皆さんのおかげ」と喜んだ。がん患者のホスピスケアなどを行っているシャローム病院（埼玉）の鋤柄(すきがら)稔院長（７５）は「精いっぱいやったなという思いもあるが、賞を取ったから終わりではなく、通過点だと思っている」と気を引き締める。